

厳正寺 水止舞



水止舞は今から 700 年ほど前、後醍醐天皇の頃の住職・二世法密上人が行った長雨止めの祈禱に由来すると伝えられています。

二世法密上人は、文永 4 年 北條茂侯の子として生まれ、18 歳より高野山で真言密教を学び、伯父厳正寺一世法円のすすめによって法密と改め厳正寺二世を継ぎました。

後醍醐天皇の元亨元年(1321)法密上人 54 歳の頃、武蔵の国(現在の関東辺り)が大旱魃かんぱつに見舞われた際には、徳の高い法密上人に救ってもらおうと、そろって祈禱を願い出ました。

法密上人は、雨乞いは他の高僧に及ばぬことと再三辞退したが、たつての願いにより稻荷明神の像を彫り、社を建て藁で龍神の形を造り、7 日間祈禱し満願の日、舟を浮かべてその龍を波へ沈めると、龍は波間に生けるが如く消え去った。上人は大願成就と仏前にかえり謝恩読経されると、不思議や早天俄かに慈雨さんさんと降り、郷民百姓みな驚き喜んだ。

しかし 2 年後(元亨 3 年(1323))の 3 月 3 日より数十日間、今度は雨降りやまず田畑はことごとく海となり、人々は難儀して他国へ逃れる者も多くあった。

長雨は法密上人の雨乞いの祈禱をしたせいだと、当時の恩を忘れ、法密上人を恨む者も出てきた。そこで上人は憐れに思い、郷民を集め再び神仏に祈禱することを告げ、三頭の龍像彫り「水止」と呼び、佛前に浄土三部経を誦し、郷民に水止の龍像を冠らせて舞わせ、笛太鼓をたたかせ法螺貝を吹かせて天に向かって踊らせた。すると黒雲が消えて日光が輝くばかり晴れ渡り、武蔵一円の人々限りなく上人の高徳をたえ喜んだ。

これより郷民は寺に水止舞を奉納するならわしとなり、御本尊が願いを聞き入れてくださったご恩に対して、仏様への感謝の舞を奉納し今日に至っております。

みちゆき 道行

水止舞前半は、「道行(みちゆき)」と呼ばれる雨乞いの儀式

厳正寺より150メートルほど離れた、大田区立大森東中学校の校門前から、藁で編んだ縄(七五三縄)を渦巻き状に巻きあげた雄雌二匹の龍神の中に大貝(法螺貝)を吹く者が1名ずつ入り、威勢良く水をかけられながら、お練りの道あけをします。

行列は、その龍神に続き、青竹で地面を叩きつけながら、牡丹が描かれた扇をかざす少年少女の警固、笛頭を先頭にした笛師連、花笠をかぶり「ささら」を鳴らす花籠が続きます。



列の最後には、舞台での主役となる、三匹の獅子が太鼓を鳴らしながら練り歩きます。

道行の列は、数メートル進むたびに立ち止まり、龍神へ容赦なく水がかけられ、法螺貝の音が響き渡ります。

「暴れる龍を懲らしめる為に水を掛ける」と伝えられることもあるが、この場合は龍神を元気づけさせる水(雨)。水が掛けられる度に、響き渡る法螺貝の音も、怒っているのではなく、高らかに雄叫びを上げているものです。

道行は、龍神が先導することから、『雨乞い』の儀式のごく初期の形式である。と推測されています。

30分ほどかけて、道行の列は
厳正寺境内の舞台へ

舞台につくと龍神は体が解かれてしまう為、そうはなるものかと、力を振り絞り抵抗します。それを渾身の力で舞台へ上げ、いよいよ水止舞がスタートします。



水止舞 道行が終わると、いよいよ境内に設営された舞台での「水止舞」に移ります

花籠二人を従えた赤い面の雌獅子と、黒い面の若獅子と雄獅子の三匹の獅子が、舞台上で奉納笛・唄に合わせて次の順に舞を披露します。

- (一) 『雌獅子の舞(女水止舞)』
- (二) 初めての出会いが表現された『出羽の舞(出舞(大水止・若水止の舞))』
- (三) 三匹が仲良く舞う『大若女・水止舞(トーヒャロ)』
- (四) 『コホホーンの舞』
この寺に施餓鬼あるとは夢しらず、おそく参れば後世のさわり
- (五) 雌獅子を奪い合う『雌獅子かくしの舞』
- (六) 仲良く3匹が踊る

中でも、『雌獅子隠しの舞』は、水止舞で最高の舞であり、誰もが舞台を見るだけで理解できる内容となっています。



また、水止舞後半では、雌獅子を巡り花籠の間を若獅子と雄獅子が勇壮な踊りを繰り広げ、その際に笛の音に併せて唄われる奉納唄が八種類あります。

- (一) 志ゆんさ、かわらへ連れしまわれし、女水止おをば今こここに隠しおかれた
- (二) 何と女水止がかくれても大場の隠しで姿見えにめそや
- (三) 白金で剣を作りし刃をつけて、女水止、大水止が愛をきははや
- (四) みわたせば雲もかすみも吹き晴らし、女水止、大水止が合うぞうれそや
- (五) 七つごうかへ長のはかまをぬいそめて、清水がほらに、とうのにおくられた
- (六) 鹿島かわらへ水止を習へと文が来て、習うべもの鹿島六つ切り
- (七) 武蔵野のいりにのたつも、ときをへて、のりのお庭で舞うぞうれそや
- (八) 我が里に雲も立つやら雨が降る、おいとまもうして、いざ帰へもうす



伝承

この地域は、多摩川のデルタ地帯で、地面を三十センチメートル以上掘ると今でも泥水が滲みだしてくるような土地柄。昔から水はけが悪く、水害に悩まされてきた。昭和 20 年代頃では、雨がたくさん降った翌朝、起きると下駄がなくなっており、縁の下まで水で流されてしまう事が度々あったといい、雨乞いはともかく、雨止めの祈禱はしばしば行われておりました。

しかし、第六世の住職の代に、密教系の天台宗から、阿弥陀仏の他力本願にすぎり、ただ念仏するだけで誰でも往生できると説いた浄土真教に宗旨替えにより、加持祈禱は一切、行われなくなりました。

従って、水止舞は佛様への感謝の舞として、今日に至っております。

かつて、厳正寺には「厳正寺舞」という勇壮な舞がありました。しかしそれを伝えるべき踊り手が、第二次世界大戦で戦死し、後世へ伝えることが出来なくなってしまいました。

水止舞も危うく同じ運命となるところでしたが、戦後の昭和 29 年(1954)に復活し、38 年 3 月東京都無形民俗文化財に指定されました。この時点に合わせて、水止舞保存協会が発足しました。

奉納日時

毎年 7 月 14 日(雨天決行) 午後 1 時から午後 3 時

会場

浄土真宗本願寺派 柳紅山 厳正寺(ごんしょうじ)

東京都大田区大森東三丁目 7 番 27 号

交通案内

- ▶ JR 京浜東北線 大森駅 東口より、京浜急行バス森ヶ崎(26 系統)、大森東五丁目(27 系統)、あるいは羽田空港/羽田車庫(21/23 系統)行きで、「大森東中学校」バス停車、徒歩約 5 分
- ▶ 京浜急行 大森町駅より、徒歩約 10 分

お問い合わせ

080-4931-4321

info@mizudome.info



[水止舞 ホームページ](http://www.mizudome.com)

www.mizudome.com



[水止舞 Facebook](https://facebook.com/mizudome)

facebook.com/mizudome



発行: ©水止舞保存協会